

【様式7】整理表(項目別評価)

評価項目(年度実施計画)		畜産センター 研究所等の自己評価		評価委員会評価	
		評価	計画達成の状況	評価	評価における特記事項
i)	1)試験研究 県民に対して提供する業務	A	○質・量の両面において概ね令和元年度計画を達成 1 黒毛和種性選別精液を用いた体内胚採取における受精率向上方法の検討 黒毛和種体内胚採取において、子宮角深部に精液注入が可能な「深部注入器」を使用することにより受精率の向上を図り、黒毛和種性選別精液を用いた受精卵生産の効率化を図ることに取り組んだ。 深部注入器を使用することで、受精率が向上する傾向が認められるとともに、正常卵に占めるA・A'ランクの割合が向上することが明らかとなった。 本技術の実用化に向け、論文化するとともに、農家採卵時や家畜人工授精講習会等で技術提供し、広く普及を図っていく。	A	○質・量の両面において概ね令和元年度計画を達成
			2 豚舎排水の窒素除去並びにリン回収・利用に関する研究 Anammox菌による窒素除去技術及び、MAP反応によるリン除去技術を豚舎排水の浄化処理に用いる際の最適な運転条件について検討した。 その結果、Anammox菌とMAP反応を組み合わせる窒素・リン除去を行う際には、活性汚泥法の前処理としてMAP法を、高度処理としてAnammox菌を使用することで、効率的に窒素・リン除去が可能であることがわかった。 また、回収したMAPには化学肥料と同等程度の肥料効果があり、結晶の粒径によって肥料成分の溶出時期に違いがあることもわかった。 以上の成果について研究報告に掲載するとともに、更なる効率的な豚舎排水の浄化方法の研究に繋げる。		
			3 家畜ふん堆肥の燃料化による環境負荷低減技術の開発 燃焼による家畜ふん堆肥の減量化と熱エネルギー回収利用を取り入れた技術の確立及び燃焼灰の肥料効果について検討した。 その結果、副資材として混合する木質資材は、オガクズが適しており、燃焼による現物削減率は、オガクズの混合割合によらず90%以上であることが明らかとなった。 また、豚ふん堆肥10に対して体積比でオガクズを6以上混合したときに、温水タンクの水温は畜舎内利用で必要となる60℃を超えることがわかった。 本技術は、ホームページを通じて情報提供するとともに、研究報告に掲載する。		
			4 夏季における暖地型牧草利用による放牧実証試験 夏季の生育及び再生が良好な暖地型牧草と寒地型牧草を組み合わせ、年間草量の平準化による周年放牧技術の開発に取り組んだ。 ソルガム類の放牧利用では、硝酸体窒素含量の観点から、出穂期近くの利用が良好であった。 また、パヒアグラスについては、播種量は3kg/10aが適当であり早期に定着させるためには耕起が有効であった。 以上の成果は、農林事務所を通じて生産者へ情報提供するとともに、これまで開発した個々の技術を体系化し、周年放牧技術を確立させる。		
	2)相談業務・依頼分析	A	○質・量の両面において平成30年度計画を達成 【技術相談】 畜産農家等からの技術相談などに対しては、随時対応し、助言・指導を行った。 ・畜産農家及び畜産技術者(獣医師等)からの技術相談 158回/年 主な相談内容(種畜の交配方法、牛の繁殖技術、飼料調製法、家畜排せつ物処理等) ・企業及び一般県民からの技術相談 3回/年 主な相談内容(バイオマス発電、七面鳥の飼養管理、豚への納豆菌投与) 【依頼分析】 自給飼料の分析や家畜ふん堆肥の分析を通して農家の経営向上に貢献することができた。普及センターからの依頼分析の減少等により自給飼料の分析点数は少なかった。 ・自給飼料依頼分析 44点/年 ・家畜ふん堆肥等の依頼分析 49点/年 ・飼料作物サイレージ共励会への協力 4回/年	A	○質・量の両面において概ね令和元年度計画を達成
	3)指導業務	AA	○質・量の両面において目標を超えた優れたパフォーマンスを実現 研修会、講習会等または生産現場において、研究成果等の技術指導、情報提供を積極的に実施した。団体等が主催する研修会等においても成果等の情報提供を行った。 受精卵移植技術の指導の他、肉用牛研究所では、高能力種雄牛に関する情報提供を、養豚研究所では「ローズD-1」等に関する指導を重点的に行うことで改良を促進し、優良家畜の増頭に貢献した。 ・研修会、講習会等での技術指導、情報提供 畜産センター本所 82回/年 肉用牛研究所 69回/年 養豚研究所 69回/年 計220回/年	AA	○質・量の両面において目標を超えた優れたパフォーマンスを実現
	4)施設・設備利用	A	○質・量の両面において概ね平成30年度計画を達成 畜産関係団体や県民に対して、分析機器等の利用開放を行った。 ・分析機器等の外部利用 (121回/年)	A	○質・量の両面において概ね令和元年度計画を達成

【様式7】整理表(項目別評価)

評価項目(年度実施計画)	研究所等の自己評価		畜産センター 評価委員会評価	
	評価	計画達成の状況	評価	評価における特記事項
5)成果の普及活用促進	A	<p>○質・量の両面において概ね平成30年度計画を達成</p> <p>主な研究成果は、「普及に移す成果」や「技術情報」として、農業改良普及センターや畜産関係機関と連携し、速効性肥料成分の簡易分析法の普及その他、技術体系化チームで和牛の放牧管理や、飼料用稲米の利用促進の指導等を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・成果検討会の開催 1回/年 ・「普及に移す成果」 3件/年 ・普及推進計画活動、技術体系化チーム活動、普及技術研修会及び現地検討会等の活動 20回/年 	A	○質・量の両面において概ね令和元年度計画を達成
i) 県民に対して提供する業務	AA	<p>○質・量の両面において目標を超えた優れたパフォーマンスを実現</p> <p>センター主催による家畜人工授精講習会の開催及び家畜商講習会の開催支援、家畜審査競技会の指導を行ったほか、新規繁殖和牛入門講座を開催し、人材の育成を図った。県立農業大学校と連携し、学生の指導を行った。インターンシップ受講学生は茨城県の畜産に大いに興味を持った。</p> <p>常陸牛共励会や豚枝肉共励会等の審査や講評を行い、県銘柄畜産物の品質向上や畜産農家の技術向上に貢献した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家畜商講習会開催支援 3回/年 ・家畜人工授精講習会の開催(センター主催)及び開催支援(大学等主催) 4回/年 ・畜産共進会・共励会等における審査 20回/年 ・インターンシップ(大学等)の受入れ 5名/年 ・畜産教育支援(県立農業大学等へ講師派遣(実習指導)8名/年 ・大学学生・院生、県立農業大学校等研究科等学生の受け入れ(農大該当学年無し) ・酪農・畜産物加工体験受入れ 1,384名/年 ・酪農畜産物加工体験者の理解・満足度評価 5.0点(5段階評価) 	AA	○質・量の両面において目標を超えた優れたパフォーマンスを実現
7)知的財産権の取得・活用及び優良遺伝資源の供給	A	<p>○質・量の両面において概ね平成30年度計画を達成</p> <p>種雄牛凍結精液、牛受精卵、系統豚及び地鶏種鶏については、畜産農家等の要望に応えて供給した。種雄牛精液と牛受精卵については、広報の強化と採卵回数を増やす等により計画を上回って供給し、農家の経営向上に貢献した。系統豚の供給も農家の改良意欲の高まりにより供給頭数が増加し、常陸牛、ローズボークのブランドアップに貢献した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・種雄牛精液供給本数 5,149本 ・場内供卵牛からの受精卵供給個数 215個 ・農家繁殖牛からの受精卵採取 153個 ・系統豚等供給(種豚) 240頭(うちローズD-1 114頭) ・系統豚等精液供給 2,707本(うちローズD-1 2,492本) ・地鶏生産用種鶏供給 2,300羽 ・種畜造成登録、牧草品種登録及び特許取得件数 0件 	A	○質・量の両面において概ね令和元年度計画を達成
8)広報・普及啓発	AA	<p>○質・量の両面において目標を超えた優れたパフォーマンスを実現</p> <p>試験研究で得られた成果は、主要成果集や研究報告、ホームページ及び畜産関係書誌を使い、積極的に情報発信した。農家等への出張に際しては積極的に情報を提供し、現場への定着に努めた。学術成果は、積極的な発表に努め、他研究機関との共同研究や情報共有につながっている。</p> <p>また、各種情報は随時ホームページとフェイスブックで提供し、畜産の技術情報を迅速に発信できた。フェイスブックは反響も大きく消費者も含めた情報発信・拡散につながった。また、酪農体験及び畜産物加工体験での来訪者に対しても広報し、畜産への理解を深めていただき、理解・満足度も高かった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「主要成果」の公開 0回 ・「研究報告」の発行 0回(前年度完了課題なし) ・畜産センター公開デーの開催 0回(0人) ・畜産講話受講者の理解・満足度評価 5.0点(5段階評価)(再掲) ・酪農・畜産物加工体験の実施 1,384名(再掲) ・ホームページ、フェイスブック等による情報発信 131回/年 ・「畜産茨城(県畜産協会発行)」「農業茨城(県農業改良協会)」等への寄稿 16回 ・査読付き学会誌等への論文発表 0本 ・学会発表 2回 	A	○質・量の両面において概ね令和元年度計画を達成

【様式7】整理表(項目別評価)

評価項目(年度実施計画)		研究所等の自己評価		畜産センター 評価委員会評価	
		評価	計画達成の状況	評価	評価における特記事項
ii) 業務の質的向上・効率化のために実施する方策	1) 全体マネジメント	A	<p>○質・量の両面において概ね平成30年度計画を達成</p> <p>畜産センター、肉用牛研究所、養豚研究所が連携を図り、連絡調整会議等を開催し、情報を共有しつつ試験研究を推進した。</p> <p>また、研修等で得た知識を活用した勉強会や伝達研修等をおし、職員全体のスキルアップに努めた。</p> <p>研究課題については、県民ニーズの把握から新規課題を検討し、内部・外部評価を受けて実施した。なお、評価結果はホームページで公開し、情報発信した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・畜産センター・研究所連絡会議 12回/年 ・試験研究課題内部評価委員会の開催 1回/年 ・試験研究課題評価委員会の開催 1回/年 ・試験研究機関評価委員会の開催 1回/年 ・主要成果発表会 1回/年 ・試験研究課題進捗状況の確認(各所) 12回/年 	A	○質・量の両面において概ね令和元年度計画を達成
	2) 県民(企業、農業者等)ニーズの把握	A	<p>○質・量の両面において概ね平成30年度計画を達成</p> <p>各種会議で要望を把握した。特に、農業経営士協会とは会議の他に研修会を開催し、研究ニーズの把握に努め、研究課題の設定に繋がった。</p> <p>【センター主催会議】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新規要望課題検討会によるニーズ把握 1回/年 ・消費者等を対象とした公開デー等での消費者ニーズの把握 4回/年 <p>【農業生産現場】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現地試験の実施による生産者ニーズの把握 1回/年 <p>【生産者組織団体主催の会議】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農業経営士等基幹農業者との意見交換会によるニーズの把握 1回/年 ・畜産関係団体による会議(畜産協会、常陸牛振興協会、新ブランド豚肉確立研究会、養豚協会、奥久慈しゃも生産組合他) 24回/年 	A	○質・量の両面において概ね令和元年度計画を達成
	3) 他機関との連携	AA	<p>○質・量の両面において目標を超えた優れたパフォーマンスを実現</p> <p>他の研究機関と研究情報収集や連携を強め共同で外部資金研究に参画したほか、団体からの資金を活用して試験研究を推進した。</p> <p>【共同研究の推進】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学との共同研究推進 5課題/年 ・国立研究開発法人機関との共同研究推進 8課題/年 ・県内研究機関との共同研究推進 1課題/年 ・他県研究機関との共同研究推進 6課題/年 ・民間との共同研究・研究協力の推進 4課題/年 <p>【普及組織との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・試験研究推進・研究成果普及・技術指導のための専技室との連携活動 16回/年 <p>【行政機関・関係団体との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国立研究開発法人研究機関等主催事業の推進会議・ブロック担当者会議の参加・協力 30回/年 ・畜産関係団体等主催事業への参加・協力 53回/年 	AA	○質・量の両面において目標を超えた優れたパフォーマンスを実現
	4) 外部資金の獲得方針	A	<p>○質・量の両面において概ね平成30年度計画を達成</p> <p>国、国立研究開発法人及び団体等との連携から、新たな受託研究費を獲得できた。さらに、県内食品企業と団体から研究資金を獲得し、納豆菌等の有用微生物の効果に関する研究を継続するなど、外部試験の獲得増につながった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国等の競争資金・(国)プロジェクト研究課題の応募採択 1課題/年 ・各種団体の委託研究への応募 2課題/年 ・企業の委託研究への応募 1課題/年 ・獲得研究費(6課題) 19,191,000円 (うち間接経費, 925,000円) 	A	○質・量の両面において概ね令和元年度計画を達成
	5) 内部人材育成	AA	<p>○質・量の両面において目標を超えた優れたパフォーマンスを実現</p> <p>国や独法が主催する研修制度を活用して知識を習得し、研究員のレベルアップを図った。また、学会や研究会に参加し、発表を行ったほか、他機関との交流を進めた。特に、新任研究員をはじめとして受講を大きく増やしたところ、基本スキル向上につながった。また、研究員の交流が共同研究や外部資金研究につながっている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国、国立研究開発法人、独立行政法人等が主催する研修(中央畜産研修、依頼研究研修、短期集合研修)及び学会・研究会等への参加人数のべ56人/年 ・所内セミナー・職場研修会 研究倫理、動物実験、家畜衛生、GAP、健康管理、救命法、安全運転等幅広く開催した。 26回/年 	AA	○質・量の両面において目標を超えた優れたパフォーマンスを実現